

「日本語から見た日本人」

ブルース・L・バートン

2001.12.05 放送

今回は日本語と日本人について考えてみたいと思います。日本語とはどのような言葉で、それを母語とする日本人はどのような民族なのでしょう。この問題を考えるに当たっては、さまざまなアプローチが考えられますが、今回は私のような外国人にとって、日本がどのように映っているかということを紹介しながら、考えてみたいと思います。

「木を見て森を見ず」ということわざがありますが、言語や文化といった社会現象を考える際、近すぎてよく見えないことがよくあります。日本に生まれ育った皆さんには見えなくても、我々外国人の目にははっきりと見えることがあります。

では前置きをそれくらいにしておいて、日本語とはそもそもどのような言葉で、どのような特徴があるのでしょうか。もちろん、「日本語」と一口に言っても、^{ひょうきほう}表記法・語彙・発音・文法・表現法など、さまざまな側面があります。ここでは、時間の制約もあって、日本人の考え方を最もよく示すと思われる、日本語の表現法について考えたいと思います。

私なりに整理すると、日本語の表現法には主に四つの特徴があります。

まず第一に、よく言われることですが、日本語には曖昧な表現が非常に多いということです。つまり、ストレートに、「何々です」と言わず、「何々ではないか」とか「何々と思われる」という表現が非常に多いように感じられます。

第二に、コンテキスト、つまり文脈が非常に大事です。日本語では、前後関係から判断できる場合、主語や目的語を省いて、誰が何をしたかはっきり言わない場合があります。

第三に、話し方は状況や相手によって大幅に異なることがある、ということです。たとえば、日本語の敬語では、相手が身内の人か他人かによって、または目上か目下かによって、使う言葉が大幅に変わります。

そして第四に、第三とも関連していますが、いわゆる男言葉と女言葉の違いです。同じ状況においても、話し手の性別によってしゃべり方が異なってきます。

他にもいろいろとありますが、今申し上げた四点は私が日本語を習い始めてからずっと意識してきたもので、いずれも日本語の性格を考える上で重要な意味をもつと思われます。そうであれば、こうした特徴は、日本人の考え方や文化とどのように関連しているのでしょうか。

当たり前のことですが、日本語の表現法は、日本社会における人間関係から切り離して考えることができません。たとえば、日本語に曖昧な表現が多いということは、露骨な断言に伴う意見の違いや葛藤を避けるための手段だと考えられます。ご存知のように、日本人は人とのつきあいにおいて軋轢を避けたがる場所があるとされますが、このことは、言葉の使い方にもちゃんと現れています。また、日本の社会において、個人および集団同

士の上下関係が大きな意味をもつと言われますが、これは、先ほど申し上げた待遇表現の問題と深く関わっているように思います。上下関係が大事だからこそ敬語というものが存在するでしょう。また、男言葉と女言葉の違いも、社会そのものの在り方と無関係ではないと考えられます。ご存知のように、現在でも社会から求められる役割は男性であるか女性であるかによって大きく異なっていますが、こうした社会状況は日本語そのものにも反映されています。

このように日本語は、日本社会の仕組みを映し出す鏡だと言っても過言ではありません。しかし、このことだけを強調しすぎると、ごく安易な日本文化論、日本人論に陥ってしまう危険性があります。よりバランスのとれた議論にするためには、いくつかの注意事項を付け加える必要があると思います。

第一に、先ほど申し上げた特徴は、いずれも一般的な傾向であって、例外もいくらでもある、ということです。たとえば日本語には曖昧な表現が非常に多いわけですが、そうでないものもたくさんあって、日本語で曖昧な文章しか作れない訳では決してありません。もちろん、物事をはっきり言えても言いたがらないのが日本人だという反論もあるでしょうが、これもやはり平均的な話で、なかには物事をとてもはっきりと言う人もいます。

第二点は、日本語や日本社会の特徴と思われるものは、大なり小なり他の言葉や社会においても見られる、ということです。たとえば、曖昧な表現は、私の母語である英語にもたくさんあります。日本人はこの点をよく勘違いするようですが、アメリカなどに行って英語で話すとき、決して思っていることを何でもストレートに言えばいいというようなものではありません。上下関係に関しても同じことが言えます。英語においても日本語と同様、状況や相手によってしゃべり方を変えることがよくあります。敬語という概念こそありませんが、目上の人と話すとき、あまりなれなれしい言葉を使うと失礼に当たるわけです。

第三点は、日本語も日本社会も固定的な存在ではなく、時代とともに変わる、生きたものだ、ということです。たとえば評論家や学者のなかには、日本や日本人のルーツを縄文時代の古昔に求める人が少なくありません。しかし生活様式や思考様式に関して言えば、現代の日本人は、縄文人どころか、江戸時代の人たちともほとんど共通性が認められません。日本語も、古い要素をもちながら時代とともに大きく変わってきています。

言葉や文化はまたこれからも変わっていくと予測されます。最近、若い人の日本語が乱れているという意見をよく聞きます。昔の日本語を基準にすると確かに乱れきているかもしれないですが、視点を変えると、新しい社会の現状に合わせて言葉が変わってきているという見方もできます。

敬語の使用や言葉の上での男女差も以前に比べて少なくなったと言われます。これを嘆く人もいますが、私個人としては、平等な社会への一歩として、むしろ歓迎すべきことのように思えます。それは、身分差やジェンダー差が言葉そのものに反映されるような社会は真の意味で平等であり得ないからです。

このように、日本語をヒントにして日本の文化や日本人の心を考えることは大変面白いのですが、その特徴は意外と掴みがたいもので、日本人にしかない絶対的な「特質」というようなものは存在しないのではないか、と考えたくもなります。

個人的な話で恐縮ですが、私は 20 数年前に日本語を勉強しはじめたとき、母語の英語との違いばかりに目を捕らわれ、そのせいか、日本語を使う日本人も我々アメリカ人とはまったく違う、異質な存在に感じられました。しかし、その後、日本人を知れば知るほど、違いは全部表面的なもので、基本的に人間は変わらないというふうに考え方が大きく変わってきました。

日本文化の特有性を否定するようなこの結論に、日本人のみなさんは寂しさを感じられるかもしれません。しかし、国境の壁があまり意味をもたなくなった現在、心の壁も取り壊して日本の独特さを強調した、時代遅れな文化論を捨てようではありませんか。

それでは。